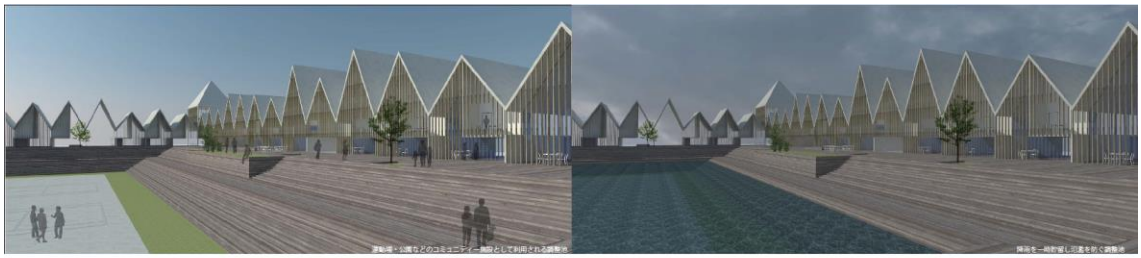
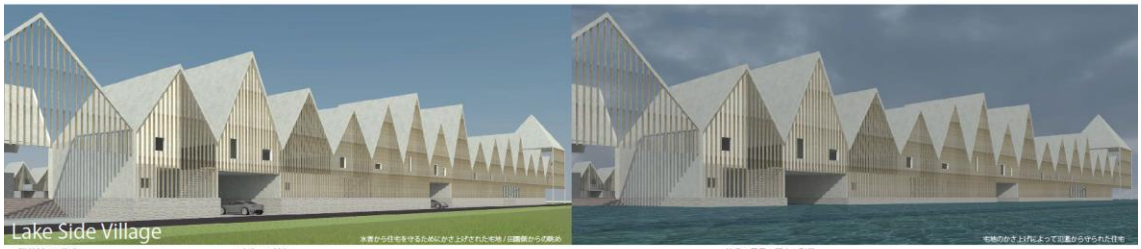
Lake Side Village





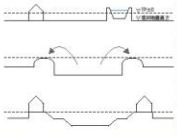
調整池 × 住宅

調整池は「水をためる場」でありながら、一方でそのスケールと形態から様々な使い方をされています。そこには巨大な対災害施設でありながら、人と人を結びつけ、生活を豊かにする大きな可能性を感じます。

調整池を町全体に分散配置させます。そして調整池と住宅の融合を提案します。

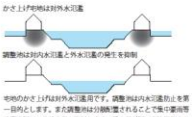
土木的なスケールの、しかし豊かな環境を生み出す「水のたまり場」は町の水害に対する機能を高める役けでなく、「人のたまり場」として津島の新たな風景となります。

水害への対応



調整池を造成する際に発生する土砂を利用しつつ宅地を作ります。宅地地盤高さは TP±0 を目安とします。大災害に対しては不十分な高さかもしれませんが、本来、災害に対する十分な想定などあり得ないと思います。大洪水や大津波には一時避難場への移動や災害対策本部からの情報伝達による早期避難での対応が合理的であると考えます。

かさ上げ宅地は対外水河川

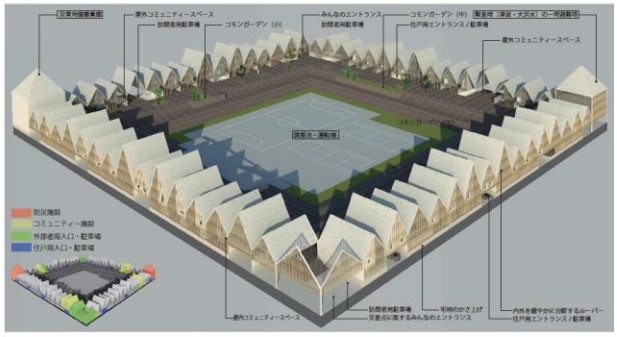


宅地のかさ上げは対外水河川用です。調整池は内水河川防止を第一目的とします。また調整池は分散配置されることで各々の要地間の際の河川への排水量を抑制します。降水量が川の流下能力を超過する危険を低減することで外水河川防止の役割も担います。

津島の風景・歴史の引用

水辺と住宅
かつての水路が集落をめぐり、生活と水辺がもっと身近であった暮らしを引用します。失われた津島の美しい風景と水辺での豊かな生活空間を本提案に結びつけます。

宅地のかさ上げ
かさ上げされた宅地の風景と水害に対する知恵を引用します。それは津島の風景への呼応であり、水害と戦ってきた津島の歴史に対する敬意の念を込めています。



調整池の配置計画とスケール

配置計画とスケールは必要貯水量と既存環境により決定します。地盤の低い地区など大貯水量を必要とする地区には高密度・大スケールで配置します。また住環境には大きな、住宅地の近くには小さなスケールの調整池を配置することで周囲の景観と住環境に配慮します。

分散配置により周辺住民にとって緊急避難施設・コミュニティー施設として利用しやすい配置となります。

住戸ダイアグラム

調整池と連続感の大きい導入を採用します。

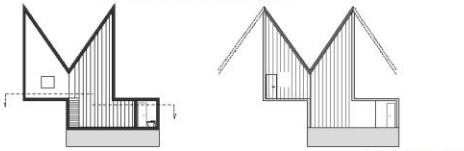
シンプルなイエ型は大きな一室です。

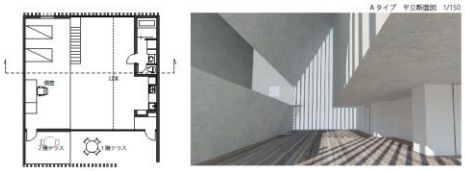
位相をずらしてみます。緩やかに分節された 2 室が現れます。

断面的にもずらします。さらに空間は分節され高さ方向への広がりも生まれます。

住戸 A タイプ（単身者、夫婦 2 人を想定）

寝室を 2 階レベルに配置することで大災害時にも生命の危機と最低限の就寝を守ります。上下左右に空間をずらす操作は 1 階の LDK と 2 階の個室を緩やかに分節しながら一体感のある開放的な住戸を実現します。調整池側に設けられた、2 階の屋外テラスはルーバーと共に外部との緩衝空間として働きます。

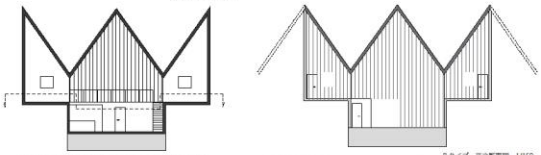


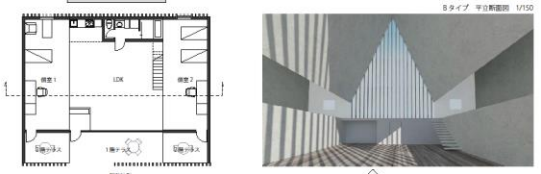


A タイプ　平立断面図　1/150

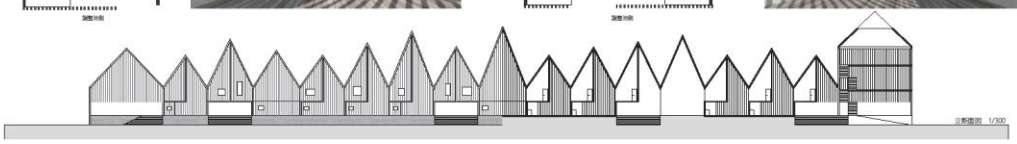
住戸 B タイプ （夫婦 2 人 + 子 1 人を想定）

A タイプと同様に寝室を 2 階レベルに LDK を 1 階レベルに配置します。対面する 2 つの個室と LDK は開放的な吹抜空間を介して連続することで一定の距離感を保つことができます。一体感のある住戸でありながら各個室は固有の領域を獲得することができます。





B タイプ　平立断面図　1/150



立断面図　1/300

調整池を町全体に分散配置させる。そして調整池と住宅を融合させる。調整池は雨水の貯留によって町の水害抵抗力を高めるだけでなく、公園等に積極利用されることで住民の交流を促し、地域単位での防災力を高める。周辺地域に対して開かれた「水のたまり場」は「人のたまり場」として地域交流と地域防災の核となる。その湖畔に人々が集い、住まう風景を「Lake Side Village」と名付けた。（石川智也）

【審査委員講評】

難波和彦審査委員長

日常的には住民のためのレクリエーションやイベントなどの共用空間として利用され、災害時には調整池となる空間を取り囲むように計画された切妻型の連続住宅の提案である。審査委員長としては、田園地帯にユニークな集落的景観を生み出そうとするコンセプチュアルで射程距離の長い提案である点を高く評価したが、集合住宅部分の地盤を嵩上げする盛土を、共用部分の掘下げによって得るという発想に、多くの審査員から技術面での疑義が提出された。

朝岡市郎審査委員

随分大きな規模の提案である。調整池が災害時にどの程度に役立つかの疑問は残るが、通常は運動場などとしての活用が提案されていて、地区の中に防災施設、コミュニティー施設など災害に対応した地区づくりが形成されている提案である。

生田京子審査委員

津島の穏やかな田園風景に対して、力強い形態と大胆な操作で土木スケールの造形を挿入していく提案は、他とは違う魅力を持った作品となっています。

川崎浩司審査委員

調整池を造る際に発生する土砂を住宅街の地盤の嵩上げに活用することにより、調整池を囲む新しい住宅の街並み空間を創造している。また、三角形の屋根を有する住宅モデルにも創意工夫がみられる。

清水裕之審査委員

防災・減災のアイデアを街区単位でデザインする方向性は重要であり好感が持てる。デザインも挑戦的であり、それが大きな欠点にはなっていないと考える。しかし、この地域における津波や高潮のことを考えると、集中豪雨時にもっとも有効な調整池をデザインの中心におかなくても良かったのではないか。

日比一昭審査委員

調整池を単に「水をためる池」と考えずに「人と人を結びつけ、生活を豊かにする空間」

と位置付ける提案は、大変共感する。また、建物群のデザイン性、内部空間の魅力と、光と影のコントラスト、間取りの可能性など、他を圧倒するすばらしい力を感じた。ただ、実現性という点でどうしても高得点が得られなかったのではないか。